

2026年6月23日

カトリック京都教区  
カトリック学校校長各位

✠パウロ大塚喜直

**2026年度 京都教区カトリック学校校長会  
各学校報告に基づく総括  
— 宗教教育の継承と学校間連携に向けて —**

**1 はじめに**

2026年度のカトリック京都司教区・カトリック学校校長会にご参加くださり、ありがとうございました。校長先生方には、日頃より各学校において、生徒一人ひとりの成長のために心を尽くしてお働きくださっていることに、心より感謝申し上げます。

今回の各校からの報告を通して、各学校がカトリック学校としての使命を大切にしながら、日々の教育活動を続けておられることを改めて確認することができました。特に、宗教科・宗教部の体制、祈りやミサ、黙想会、学校行事、教職員研修、ボランティア活動などを通して、それぞれの学校が置かれた状況に応じて、カトリック精神を生徒と教職員に伝えようとしておられることに、深く敬意を表します。

一方で、宗教教育を担う人材の不足、カトリック信者である教職員の減少、司祭・修道者との関わりの変化、宗教行事や教職員研修の継続の難しさなど、共通する課題も見えてきました。これらは一つの学校だけで解決できる課題ではなく、京都教区と各学校、また学校相互の連携の中で、共に考えていくべき大切な課題であると受け止めています。

以下、各学校から寄せられた報告を踏まえ、宗教に関する事項と、京都教区への要望について総括いたします。

**2 各学校の報告から見た宗教に関する事項の総括**

**2-1 学校生活全体を通じた宗教教育**

各学校の報告からは、カトリック学校としての宗教教育が、宗教科の授業だけでなく、日々の祈り、学校行事、ミサ、黙想会、聖書朗読、教職員研修、生徒への個別のかかわりなど、学校生活全体を通して実践されていることが確認できました。

宗教教育は、特定の時間や行事に限られるものではありません。授業、生活指導、困難を抱える生徒への支援、教職員同士の協力など、学校の日常の中で、生徒一人ひとりを神に愛された存在として大切にする姿勢によって具体化されます。

**2-2 祈りと宗教行事の大切さ**

多くの学校では、朝の祈り、職員朝礼や職員会議での祈り、学校行事の始めの祈り、聖歌、聖書の言葉、ミサや宗教行事を通して、生徒と教職員がカトリック精神に触れる機会を大切にしています。

朝の祈りには、校長先生をはじめ、カトリック信徒ではない先生方も共に参加して下さっています。祈りが信者だけのものではなく、学校共同体全体で生徒の成長を願い、一日を始める大切な時間として受け止められていることを、大変ありがたく思います。

また、創立記念日、聖母月、クリスマス、ご復活、追悼の祈り、黙想会、教会訪問などの宗教行事は、生徒が神と出会い、祈りに触れ、カトリック学校としての雰囲気を経験する大切な機会となっています。

### 2-3 信仰を生き方として伝える教育

各学校では、信仰を単なる知識として教えるだけでなく、生徒が祈り、感謝し、他者を大切に、社会に仕える心を育む教育が行われています。ボランティア活動や奉仕活動を通して、生徒たちは、困難の中にある人々に心に向け、共に生きることを学んでいます。

このような取り組みは、カトリック学校の使命にかなう大切な歩みです。生徒たちが、成績や能力だけで評価されるのではなく、かけがえのない人格として大切にされ、他者のために自分を生かす喜びを学んでいくことは、カトリック教育の大きな実りであると思います。

### 2-4 宗教教育を担う人材の課題

一方で、宗教教育を担う人材については、各校とも課題を抱えています。宗教科担当者が少数であること、非常勤講師や兼務者に依存していること、カトリック信者である教職員が少なくなっていること、修道会や司祭・修道者との日常的なつながりが以前より弱くなっていることなどが共通して見られます。

この課題は、単に宗教科担当者を確保するという問題にとどまりません。カトリック学校としての精神を、どのように学校全体で共有し、次の世代へ受け継いでいくかという課題でもあります。

### 2-5 学校全体で担う宗教教育

今後は、宗教教育を一部の担当者だけに任せるのではなく、学校全体でカトリック学校としての使命を共有し、教職員全体で支えていく体制づくりが求められます。

宗教科や宗教部は大切な役割を担っていますが、カトリック教育はそれだけで成り立つものではありません。教職員一人ひとりが、生徒へのまなざし、言葉がけ、授業、行事、保護者対応の中で、福音的な価値を具体化していくことが重要です。

### 2-6 宗教に関する事項のまとめ

総じて、各学校は厳しい教育環境の中にあっても、カトリック学校としての精神を失わないよう努力しています。今後は、宗教科や宗教部の体制整備に加え、教職員全体がカトリック教育の意味を理解し、日々の授業、生活指導、学校行事、生徒支援の中で、カトリックのまなざしを具体化していくことが重要です。

京都教区としても、各学校の歩みに敬意を払いながら、宗教教育の継承、教職員の養成、学校間の連携を支えるために、できる限り協力してまいります。

## 3 各学校からの京都教区への要望と教区としての対応

各学校から京都教区に寄せられている要望を見ると、単発的な宗教行事への支援にとどまらず、宗教教育の継承、教職員養成、司祭・修道者との連携、学校間ネットワークの形成、将来像の共有といった、継続的で組織的な支援が求められていることが分かります。これは、各学校がカトリック学校としての使命を次の世代へ受け継いでいこうとしている表れであり、大変意義深いことです。

### 3-1 宗教行事・学校行事への協力

各学校からの要望として、入学式、卒業式、創立記念行事、ミサ、黙想会、聖母月、クリスマス、追悼の祈りなど、宗教行事や学校行事への司祭の派遣、司式、講話、メッセージなどの継続的な支援が挙げられています。

これらの行事は、生徒が神と出会い、祈りに触れ、カトリック学校としての雰囲気を経験する大切な機会です。そのため、まずは各学校の所在地に近い小教区、またその小教区が属するブロックの司祭・修道者に協力を依頼していただきたいと思えます。

必要に応じて、京都教区内の他の司祭、さらに他教区や修道会の司祭・修道者にも協力をお願いし、宗教行事や学校行事に招いていただくことも望ましいと思えます。ただし、司祭数や日程の制約もありますので、学校・小教区・ブロックの間で早めに相談し、年間予定の中で無理のない協力体制を整えていくことが大切です。

### 3-2 教職員研修とカトリック教育理解の継承

教職員の信仰理解とカトリック教育理解を深める研修の充実も求められています。新しく採用される教職員の多くが、キリスト教やカトリック教育に十分な接点を持たないまま学校現場に入ってくる現状があります。そのため、カトリック学校で働く教職員が、カトリック教育の基本、人間観、祈りの意味、学校生活における福音的なかわりを、分かりやすく継続的に学ぶ機会を整えることが必要です。

校長には、常勤・非常勤の別にかかわらず、すべての教職員をカトリック学校の教育共同体を共に担う存在として受けとめ、学校全体でカトリック教育を支える体制を築いていくことが求められます。あわせて、教職員だけでなく、学校運営に関わる関係者も、カトリック精神とカトリック教育の基本を学び直すことができるよう、研修の内容や方法を工夫していくことが大切です。

京都教区としては、学校からの依頼に応じて、教職員研修、黙想会、講話に協力することができます。また、各学校が独自に研修を行うだけでなく、複数の学校が合同で学ぶ機会を設けることも有益です。

### 3-3 宗教教育の担い手不足への支援

宗教科専任教員や宗教部担当者が少ない学校では、宗教行事や宗教教育を維持すること自体が大きな負担となっています。担当者個人の熱意に依存するだけでは、宗教教育の継承が難しくなる恐れがあります。

京都教区としては、各学校が宗教行事の準備、祈りの指導、黙想会の企画、教材や資料の共有などについて相談できるよう、まず学校の所在地に近い小教区およびその小教区が属するブロックの司祭との連携を促してまいります。必要に応じて、ブロック司祭を通して、学校と司祭・修道者・教区関係者との協力体制が整えられるよう助言し、支援してまいります。

### 3-4 カトリック学校間の連携と経験の分かち合い

各学校は、それぞれの歴史、設立母体、規模、地域性を持ちながら、宗教教育の継承、教職員研修、黙想会、学校行事、教材、祈りの実践などについて、共通する課題も抱えています。そのため、学校同士が経験を分かち合い、互いに学び合い、励まし合う場を大切にしていくな必要があります。

京都教区としては、近畿カトリック学校連盟および中部カトリック学校連盟の取り組みを尊重し、それらの研修や交流の機会を生かしながら、教区内のカトリック学校相互の連携を深

めていきたいと思います。あわせて、京都教区のカトリック学校校長会や必要に応じた担当者会などを通して、各学校の情報共有と協力の場を整えてまいります。

特に、将来に向けて、カトリック学校が何を大切にし、どのような教育共同体として歩むのかを共に識別することが重要です。そのため、京都教区としては、各学校の自主性と固有の歩みを尊重しつつ、各学校の現状と課題に耳を傾け、必要に応じて学校関係者との対話の場を設けながら、カトリック学校の将来像を共に考えてまいります。

### 3-5 司教・司祭の訪問と励まし

学校現場への司教・司祭の継続的な訪問と励ましも、各学校から期待されています。司教としては、各学校から要望があれば、日程の許す範囲で、宗教行事への参加、学校訪問、教職員との対話などに喜んで伺いたいと思います。

同時に、教区と学校との関係は、行事の時だけの関係にとどまるものではありません。日常的な相談、情報共有、祈りを通して、少しずつ深められていくものです。また、各学校の現状や課題について、学校法人の理事長とともに、適宜、司教と懇談し、分かち合っていたく機会があれば、大変ありがたく思います。

## 4 結び

2026年度の校長会での各学校からの報告を通して、京都教区内のカトリック学校が、それぞれの置かれた状況の中で、祈り、教育、奉仕、共同体づくりを大切にしながら歩んでいることを確認することができました。同時に、宗教教育の継承、教職員の養成、司祭・修道者との連携、学校間の協力、将来像の共有という課題も、教区全体で受け止めるべきものとして明らかになりました。

京都教区としては、各学校の自主性と固有の歩みを尊重しつつ、カトリック学校が福音のまなざしによって人を育てる教育共同体であり続けるよう、これからも共に歩んでまいりたいと思います。

校長先生方の日々のお働きに改めて感謝申し上げます。いのちの与え主である神が、各学校の歩みを祝福し、生徒、教職員、保護者、卒業生、そして学校共同体に関わるすべての方々を、希望のうちに導いてくださいますようお願いいたします。

以上